

63 医学古典における「大指間」の意味について

天野陽介¹⁾・宮川浩也¹⁾²⁾

小曾戸 洋¹⁾・石野尚吾¹⁾

¹⁾北里研究所東洋医学総合研究所

²⁾東洋鍼灸専門学校

一. はじめに

「間」字は二点の間(あいだ)を意味し、指の場合は二本の指の間を指す。ところが「大指間」は「大指」のみであり、二指の間とは大指と次指の間だけである。はたしてそのように解釈しているのか苦しむ場合もある。よって、「間」の用例を調べ、その意味するところを明確にする。

二. 調査方法

『素問』『靈樞』『難経』『傷寒論』『金匱要略』『史記』扁鵲倉公列伝の六種の医学古典の「間」の用例をあつ

め「間」の意味を調べ、特に「指」に関する記載においてその意味するところを明らかにし、その結果を踏まえて「大指間」を考察する。

三. 結果

①「大指間」および「大指之間」は『靈樞』のみに用例があり、前者は七見、後者は四見し、合計十一見する。

②「指間」という場合は場所を示しているのでおむね二本の指の根本を指す。指先の位置で「指間」と考えたと空間になり、こじつけ的な解釈となる。たとえば、「浅刺手大指間」(熱病篇)を張介賓は少商穴とするが、指先では二本の指の間は空間であるから、ここでは指の付け根であり、奇穴の虎口穴を指すものと思われる。

③「中指外間」「中指内間」「次指外間」という表現があるが、「外」は小指側、「内」は拇指側を指すので、主たる指に対するもう一本の指を想定して、都合二本の指の間と解釈する。

④「液門、小指次指之間」「俠谿、小指次指之間」という表現があるが、「小指次指」は無名指（薬指）一本を指すので（「小指と次指の間」とは読めない）、「小指（小指）次指之間」と「小指」が省略されているものとし、やはり二本の指の間とみなして読むべきである。

⑤「十指間」は左右の五指の間という意味で、都合四カ所の指の根本の間がある。

⑥「大指間」という場合は、やはり大指と次指の間（大指外間）ということになる。本輪篇に「行間、足大指間也」というのがその証である。口問篇に「刺足大指間上二寸留之」とあるが、「大指間」が行間だとすれば、「二寸上」は大衝である。

⑦「三脈動于足大指之間」（終始篇）、「衝脉」循跗、入大指間」（逆順肥瘦篇・動輸篇）は、再検討が必要である。

四．考察

「間」字は二指の間を意味するという原則に従うなら

ば、「靈枢」の中の「指間」はほぼ合理的な解釈ができる。「大指間」という場合はおおむね「大指外間」（行間付近）を指すが、経脈篇と營氣篇では、足陽明経が跗上で別れて大指間に注ぐばかりでなく、足少陽経も跗上で別れて大指間に注ぐと記述されていて、型どおりに二本の指の間と解釈できない箇所もある。したがって慎重に検討しなければならない。

この「間」字の検討を足がかりに、今後は「腎間」についても検討する予定である。